

茨城県ひたちなか市における小学生を対象とした 地域価値の創出を自発的に促すワークショップデザイン

環境情報学部3年 速見友里

0. はじめに

本報告書では、8月28日（日）に開催された、茨城県ひたちなか市に住む小学生を対象としたワークショップ「つくろう！マイみなと地図」についての活動報告を行う。

1. 活動趣旨

近年の地方都市は、過疎化や高齢化といったコミュニティの衰退を問題に抱えている。地域やコミュニティに対する興味や愛着を育み、長期的な視点に立った地域の再建が求められている。そうした中で、本ワークショップ（以下、WS）では、茨城県ひたちなか市に住む子ども（旧勝田市と旧那珂湊市をつなぐローカル線ひたちなか海浜鉄道湊線沿線に住む子どもを主とした）を対象とし、子ども一人ひとりが、「自分にとっての那珂湊」を認識させる機会を提供し、まちへの関心や愛着を育むことを目的とした。

2. 活動概要

■時間：10:30～15:00

■参加人数・内訳：計6名（+保護者1名）…小2女、小6女、小3男、中2女、保護者、各1名、小3女2名

■概要：午前の部（10:30～12:50）では、子ども一人一台カメラを持って那珂湊のまちへ出かけさせ、自分の興味・関心に基づいた写真を撮ってきてもらった。そうして集まった写真をもとに、午後の部（13:50～15:00）では、一枚の画用紙に那珂湊の地図、アルバム、絵をつくってもらった。自分にとってのまちの印象的なものやことを振り返らせることを主な目的とし、形式（地図や絵といった）にこだわりを持たせないこととした。

3. 活動成果

■午前の部＜カメラを持ってフィールドワーク＞

普段は、「住む」「歩く」という無意識の中過ごしているまちを、カメラを持って撮影しながら歩いてもらうことで、まちのおもしろいところ、良いところを見つけ出し、自分の関心に向き合う姿が見られた。子どもが撮影してきた写真は、それぞれ、人に注目したもの、商店の看板に注目したもの、様々であった。子ども一人ひとり、興味関心のあり方に多様性があった。また、発色の良いものに引き寄せられていたり、ものに近づいて撮る写真が多かったりと、大人とは少し違った視点でまちを捉える姿勢も感じられた。

■午後の部＜写真をもとに制作物をつくるワーク＞

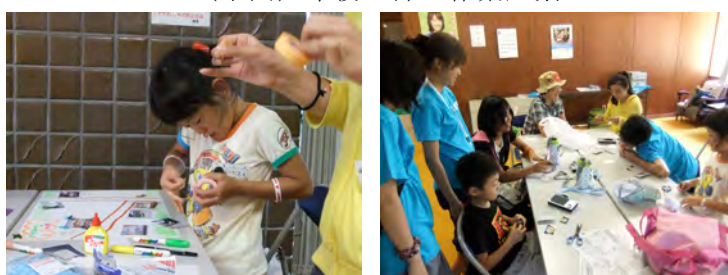
午前中にまちで撮ってきた写真をもとに、地図や、地図という形式に止まらない思い出絵図をつくってもらった。クレヨンや色鉛筆に限らず、マスキングテープやモールなど多様な画材を用意したこ

とで、子どもが自由に創作活動を行う姿が見受けられた。主に小学校低学年の子どもたちは、ファシリテーターがサポートせずとも、クリエイティブに画材を応用し、画用紙の中に自分の世界をつくる姿が見受けられた。



(上図) 午後のワークで作られた成果物 (左から、小2女、小3男、小3女)

(下図) 午後の部の作業風景



4. 今後の展望

今回のワークショップを通じて、いくつか課題点も浮き彫りとなり、今後の展望を開くことができた。

今回は、子どもにカメラを持ってまちを歩かせ、制作物をつくることにより、まちへの関心や愛着を育むことを目的とした。それらが達成されるための前段階として、子どもが自分自身の中で、新たな気づきを生み出させるというのが重要となった。

その点では、今後、子どもの中にある既成概念から出発し、ワークショップの目的を達成するところまで、いかに子ども自身の頭で考えさせ、新たな気づきを生み出すか、という点に関してプログラムの企画を深めていかなければならない。その要素として、状況に応じたファシリテーターのアドリブ的声かけ（誘導）に着目し、「～な声かけをした場合、子どもは～な反応をした」といったパターンを累積し、ファシリテーターの役割について研究を進めていきたい。

5. 謝辞

本活動の実施において、その研究遂行にご協力いただいた諏訪研究室の教員・学生の皆様、みなとメディアミュージアムのスタッフの皆様、ひたちなか市商工会議所青年部をはじめとした地元の皆様に感謝したい。また、本研究は、2011年度湘南藤沢学会「シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金」の支援の下に行われた。